

④ 2003. 3. 31

[連載]

技術教育研究会と私の歩み

19

佐々木 享

技術科と家庭科は別の教科

前記の日教組の検討委員会には私より先に技術科担当の委員としては田中喜美氏が委員として参加することが決まっていたので（私が推薦したわけではない）、私は技術科の問題の討論には参加しないことを申し入れていた。

この委員会では、何回かの総会という全体討論を経て作成予定のパンフレットの構想がおよそ固まった後で、全体討論にかけられた問題があった。たとえば、田中喜美氏が技術科については独立したパンフを作る構想をすすめていた（家庭科担当委員もこれに賛成していた）のに対して、進路指導問題担当の専門委員として参加していた池上正道委員が異議を申し立て、「技術・家庭科」はまとめて1冊とすべきだと主張した。こうした意見を調整するために総会が開かれた。

私は黙っていたが、会長の山住氏からたっ意見が求められた。やむなく私は、技術科と家庭科とは目的も内容も全く異なる互いに独立した教科で、中学校学習指導要領が「技術・家庭科」なる教科を一つの教科にしているのは行政的な便宜的措置に過ぎない、というかねてからの主張を開陳した。その他の委員からも発言があつて結局「技術科」は独立して扱われたが、「技術・家庭科」単一教科論の根深さに改めて考えさせられた。

この委員会の成果は、『改訂学習指導要領と私たちの課題』シリーズの15冊のパンフレットとして1989年に日教組から刊行された。

『教育学学術用語集』について

日教組の教育課程検討委員会の仕事とはほぼ同じ時期に、日本教育学会の「学術用語集」教育学編の選定する大がかりな作業が始められた。一口で言えば、学術用語を拾い上げ、それぞれの用語に対応する英語を選定し、その内容を一義的に確定する作業である。これが確定すると、行政はもちろん教科書の記述などにも規制が及ぶことになる。自然科学、工学の幾つかの分野ではすでに確定し、あるいはその改訂版が発行されている。しかし人文・社会科学の分野では、用語自体に価値観が含まれている場合があるので、なかなか難しい作業である。この委員会で私は技術教育、職業教育領域を担当した。20名近くの各領域の担当委員はそれぞれ専門委員の協力を得て採録すべき用語を収集し、それを全体会議に持ち寄り、さらに調整委員会で調整するという手順で進められた。私自身は、田中喜美、堀内達夫、寺田盛紀、朴木佳緒留（家庭科教育関係）の諸氏の全面的な協力を得た。

作業自体は確か3年で一応終了した。この仕事は文部省から委嘱されて始められたはずだったのにもかかわらず、日本教育学会が提出したリストを文部省が承認しないために暗礁に乗り上げ、いまだに学術審議会にかけられていない。

この成果を無駄にするのは忍びないとして、今日では日本教育学会学術用語研究委員会編『教育学学術用語集 採録用語案』（1996年4月）として日本教育学会から刊行されている。

同学会に申し込みれば入手できるはずである。

技教研代表委員となる（1990年8月）

技教研では、これよりまえ、1977年8月に長谷川淳先生がたつての希望で在任7年の代表委員を辞任されたので、原正敏先生が2代目の代表委員に就任した。原正敏先生はそれから13年間にわたって代表委員をされたが、1990年8月には辞任を申し出られたので、私とその後任に選出された。私は58歳だった。当時の事務局長は、私と入れ替わるように名古屋から上京して東京工大附属工高に勤務していた長谷川雅康氏だった。

以前から私は、重要なことは事務局長を中心とした常任委員会で決め、執行する方がよいと考えていた。しかし、代表委員が不在のために重要なことが決まらないなどということがあって迷惑をかけてはいけないので、毎月の常任委員会には努めて上京した。正直に言えば、常任委員会の後みんな一杯やるのが楽しみだったからでもある。

しかし私が代表委員を引き受けるについては、民間教育研究団体連絡会（民教連）の代表者会議などはいつも東京で開催されるから、技教研がいつも欠席では不都合だし、何かの折には代表委員に代わることができる役職を定めておいたほうがよい、ということで後に「副代表委員」の制度が設けられ、初代の副代表委員には河野義顕氏が選出された。この種の気配りは、大谷良光氏の発想だったように記憶する。

常任委員会の会場確保は、歴代事務局長の苦勞の一つであった。私が代表委員となった1990年頃は、長谷川事務局長が勤務していた東京工大附属工高をお借りすることが多かった。その後は、常任委員の岡田幸一郎氏が勤務していた新宿区立淀橋第二中学校の部屋を借用していた。岡田氏は東京都教組新宿支部

の支部長（非専従）の激職にあったのによく世話をして下さった。ついでに言えば、常任委員会終了後の飲み屋も岡田氏の紹介である。岡田が退職される頃には淀橋第二中学校自体が統廃合の影響でなくなってしまい、新たに会場探しをしたが、いつも行く飲み屋の主人の世話で、すぐ近くにある角三会館という地域の集会所の一室を格安の費用で借りることができるようになって安定した。

若い力とベテラン

常任委員会に出席するようになって驚いたことは、事務局長などは別として、実務を支え、討論に参加する常任委員に若い人たちが多いことである。名古屋在住者となって10数年たっていたから当然だが、はじめのうちは、大会などでお目にかかった記憶はあっても、顔と名前が一致しない人が少なくなかった。若干の民間教育研究団体では年輩者から若い人への継続がうまく行かないという話を聞かされているので、技教研にとっては心強い限りである。同時に、1960年の創立大会に参加した一人である幡野憲正氏がほとんど毎回常任委員会に出席し、要所要所での確かな発言をされていることも驚きだった。

都心に勤務している人は少ないのに、毎回の常任委員会に10～15名参加している。終わり近くなるとだんだん増えてくる。終了後はいつも飲み屋に寄るのだが、遠く埼玉県から来る会報編集長の直江氏などは常任委員会修了まぎわにやってくるのがしばしばである。毎回、こういう若い力とベテランが技教研ひいては日本の技術教育を支えているのだと実感する。

かつて河野氏が切り開いた技教研東京サークルが渡辺浩康氏ら若い人たちの手で持続的に活動していることも知った。（つづく）